

V-1

大量化学療法施行多発性骨髓腫患者におけるハイリスク群の検討

杉浦 勇、倉橋信悟、鈴木弘太郎、澤本晶代、足立達也

豊橋市民病院 血液・腫瘍内科

【目的】ハイリスク（HR）群多発性骨髓腫患者における大量化学療法の効果を検討した【方法】当院にて大量化学療法施行した患者のうちで HR 群患者の予後を検討した。HR 群は以下うちのいずれかを有する患者と定義した。1) ISS=3、2) G 分染法で 13 番染色体の欠失 (G-d13) の存在、3) FISH 法で 17 番染色体短腕の欠失 (F-d17p) の存在、4) t(4;14) の存在、5) t(14;16) の存在【結果】対象患者は 35 名で、年齢中央値は 55 歳 (39 - 68 歳)。M 蛋白型は IgG 型:22 名、BJP 型:7 名、IgA :4 名、IgD:2 名であった。各因子を有する患者数は ISS:7 名、G-d13:5 名、F-d17p:4 名、F-t(4;14):3 名、F-t(14;16):1 名であり、HR 群は 15 名であった。大量化学療法は標準的方法であり、4 名が自家移植 2 回、1 名が自家同種タンドム移植を受けた。HR 群は非 HR 群より有意に予後不良であった ($p=.0089$) が、因子別に検討すると F-t(4;14) のみ有意であった ($p<.0001$)。【結論】Avet-Loiseau (Blood 2007)、Gutierrez (Leukemia 2007)、Stewart (Leukemia 2007) らにより予後不良群が定義された。本検討の定義は Stewart らほぼ従い大量化学療法でも不良な予後を示すことができたが、症例数が少なく t(4;14) の存在に強く影響された。しかし、t(4;14) 症例のなかにも予後良好群が示唆されている (Moreau 2007)。予後不良群が適切に定義され治療前に患者の評価が適切に実施されるならば、新規薬剤を早期から使用したり、自己同種タンドム移植を検討する正当性が示される。